

早稲田大学創立125周年記念商学学術院イベント 「次世代への先見」懸賞論文掲載について

『産業経営』編集委員長 高瀬 浩一

さる2007年10月12日（金）に早稲田大学国際会議場井深大記念ホールにおいて、統一テーマ「次世代への先見」のもと、早稲田大学創立125周年記念商学学術院イベント「記念講演」、「懸賞論文」、「ビジネスプラン・コンペティション」が開催されました。懸賞論文は学部生、大学院生、一般の3部に分かれ、統一テーマに関する論文を、早稲田大学に限定することなく日本全国から公募いたしました。レフェリーによる厳正な審査の結果、応募論文の中から特に優秀なものを受賞論文として選定いたしました。イベント当日、各部第1位の論文発表と以下に示すような受賞論文の表彰が行われました。

学部生の部では、第1位「個人投資家と株式市場の効率性—配当と株式優待の権利落ちに関する考察—」共著5名 代表者 増田正志氏（早稲田大学商学部）、佳作「マチトレジャー—男児向け外遊び誘因玩具を考える—」共著5名 代表者 大竹健太氏（早稲田大学商学部）、佳作「日本の農業の現状と未来」共著12名 代表者 喜多見祐太氏（早稲田大学商学部）となりました。

大学院生の部では、第1位「次世代モバイルコミュニケーションにおけるサービス時間規制方式つきモデルの一検討」単著 篠原瑛氏（早稲田大学大学院商学研究科）、第2位「スイッチングバリアの顧客維持に対する影響」単著 八島明朗氏（早稲田大学大学院商学研究科）となり、一般の部では、第1位「相互応報性の存在と経済への影響—ダブル・オークションの経済実験による賃金の硬直性と総余剰改善の考察—」単著 内山登氏（赤木屋証券株式会社）、佳作「日本の大学の「職業教育」に関する一提案—あるグローバル企業の新人社員研修をベンチマーク事例とした検討—」単著 伊藤幸子氏（キャリア開発研究所）でした。

この懸賞論文の懸賞内容として、イベント当日における表彰とともに、極めて優秀な論文には学術雑誌『産業経営』掲載の機会が与えられることになっておりました。『産業経営』は商学学術院総合研究所の下部組織である産業経営研究所の機関紙であり、今回のイベント成果公表のため、懸賞論文の特集を掲載する場として相応しいと判断されました。イベント終了後、掲載論文選定のための編集委員会が開催され、慎重な審議により、各部第1位の論文が掲載可能論文となりました。編集委員会からのコメント（論文タイトル変更などを含む）を十分反映し、かつ、『産業経営』投稿マニュアルに準拠する形で改訂した上で、今号に特集論文として掲載されることになりました。

今回の行事は早稲田大学創立125周年を記念する、全学規模のイベントの一環でもあり、商学

学術院挙げての大イベントでした。当学術院では、他箇所で行われたような著名人による公演のみではなく、卒業生を含め学生自身も参加できるイベントが企画されました。それは、商科創設から100年を超える長い歴史の中で、大学全体に占める商学部生の数的かつ質的な役割の大きさからも理解できるはずです。現在建設中の商学部棟の前身である11号館が、卒業生を中心とする寄付により建設されたことはあまりにも有名です。

『産業経営』は産業経営研究所の設立とほぼ同時期に編集が開始され、初号発行以来早30年以上経ちました。しかしながら、大学の長い歴史と伝統に比べれば、当雑誌は未だ発展途上といわざるを得ません。この度、大学創立125周年記念の懸賞論文を『産業経営』に掲載できることは、誠に幸運であり、かつ、身に余る栄誉と感じております。イベントの成果として、是非、当特集論文をご一読いただければ幸いです。

近年、『産業経営』はレフェリー制を導入して、本格的な学術雑誌として再出発いたしました。この数年間、査読付きジャーナルとして徐々に認識されるようになり、日本の学術における地位も確実に進歩していると自負しております。これからも、各分野からの幅広いご投稿をお願い申しあげるとともに、研究フロンティア発展のために尽力させていただければと存じます。